

多文化教育研究プロジェクト 連続セミナー 「多文化共生としての舞台芸術」

横山綾香

連続セミナー「多文化共生としての舞台芸術」¹は、昨年度まで本学の教養科目として開講されていたリレー講義「舞台芸術に触れる」を継承したイベントである。このリレー講義は、外語祭で学生らが行う「語劇」を支援する目的で2002年度に開始されたが、今年度からは総合文化研究所主催のイベントとして学外にも公開されることになった。それに伴って日本を含めた世界の演劇の現状や歴史、多様性、問題点をさまざまな視点から考察するセミナーとして内容が拡充された。2021年は演劇研究者2名と舞台芸術の現場に携わる方6名に御協力いただいて、zoom ウェビナーを用いたオンラインセミナーを4月から10月に合計8回行った。

第1回はドイツ演劇研究者の平田栄一朗氏が「現代的演出」について講義を行った。演出家の主たる仕事は戯曲を解釈することである。しかし、1960年代に劇場が議会では許容されない政治思想をアピールする場となった結果、劇作家の意図や時代背景を大きく超えた解釈によって演出家自身の考えを示した演劇が許容されるようになった。そうして生まれた同一の戯曲を解釈した複数の演出を見比べる経験は、物事を知る際には（政治家・報道・専門家などの）解釈を介すことが前提となっている現代社会を生きる上で必要な判断力を養いうるという内容であった。

第2回は、国立ベトナム青年劇場芸術監督である杉山剛志氏がA. チューホフの『桜の園』を題材に戯曲解釈のデモンストレーションを行った。役が置かれた「状況」と「事件」（「状況」を変化させる事象）を軸として戯曲を読み解くという手法が紹介された。その手法で戯曲を読み直すと、『桜の園』の冒頭は召使いの男女が主人の帰りを待っているように見えるが、実は召使いの男がプロポーズをする機会をうかがっている様子が明らかになるという、ロシア文学に長く関わるものでも目から鱗が落ちる講義であった。

第3回は、東京演劇集団「風」演出家の江原早哉香氏が演劇の社会的課題とそれに対する劇団の取り組みを紹介した。演劇鑑賞には居住地や経済事情など多くの障壁が存在するため、文化資本を享受するうえで格差が拡大してしまう可能性を有している。「風」ではそれに抗う活動として、海外の劇団との共同制作による街頭演劇、小中高生向けの巡回公演、視覚・聴覚障害者向けに字幕や手話通訳を導入したバリアフリー演劇に取り組んでいる。単なる活動紹介に留まらず、江原氏と劇団員が語り合う時間もあり、劇団の雰囲気や

1 本連続セミナーのポスター・日時・詳細は、特設ページに掲載されている。

<http://www.tufs.ac.jp/research/seminars/gogekiseminar/>



情熱が伝わるセミナーであった。

第4回はオペラ演出家の馬場紀雄氏による字幕のレクチャーが行われた。馬場氏は自身で演出するオペラの字幕を自ら手がけている。字幕制作において製作者の創造性が発揮されるのは台本の要約作業である。映画字幕のように観客があらすじを知らない場合は内容を正確に伝えることを最優先する。しかしオペラのあらすじは観客にとって既知の内容であるため、字幕の自由度が高く、音楽に集中してほしい時には文字数を減らすなど演出の意図を反映させることができる。オペラ字幕は照明や衣装のような演出家の解釈を観客に伝えるためのツールであると馬場氏は述べている。

第5回はミュージカル脚本家・翻訳家の高橋知伽江氏が担当した。前半はミュージカルにおける歌の役割を解説した。ミュージカルでは歌によって異なる時間・場所で起きている事件を同時に見せられるため、複雑で繊細な状況をわかりやすく伝えられると高橋氏は述べた。後半は多言語（日本語と外国語）が交わる作品の経験を話した。互いの言葉が通じあわない場面の台詞をすべて日本語に訳すと状況が見えにくくなるため、翻訳者による創意工夫がなされる。高橋氏が翻訳した、太平洋戦争中の日系アメリカ人を描いたミュージカル『アリージャンス〜忠誠〜』では、英語が分からないおじいちゃんのために英語が分かる孫が通訳する日本版オリジナルの台詞を追加したことが紹介された。5作品にわたる舞台映像もあり、劇場に足を運びたくなる講演であった。

第6回は新国立劇場・元舞踊チーフプロデューサーの永田宜子氏が異文化接触がバレエに与えた効果を話した。バレエは身体を通じた芸術であるため、国ごとの差異が無いように思われがちである。実際には国ごとの個性が存在し、その差異がバレエ界を活性化させている。もちろん現在では差別表現と捉えられる内容には必ずチェックが入り、大抵はカットや振り付けや衣装の改訂といった対応がとられる。しかし人種やジェンダーの違いはバレエを豊かにする原動力であり、それぞれの強み・弱みを受け入れて、強みを打ち出せるような舞台を作ることが理想であると永田氏は述べていた。

第7回は能楽師の小早川修氏が担当した。能が表現するのは幽玄美の世界である。感覚的境地や余情を重んじるため、能では徹底して具体的な表現が省かれる。能面で演者の顔を隠してしまう。衣装の柄は簡素で種類も少なく、照明も大道具も用いない。脚本は七五調のため言葉が省略される。あえて簡単には理解させないことで観客の想像力を掻き立て、この世ならざる世界へと導く。能の鑑賞には「言語に頼り過ぎないことが重要。ノンバーバルコミュニケーションという単語があるように言語が通じなくても理解することはできる」という指摘が印象的であった。

第8回は、連続セミナーの総括として演劇評論家の内野儀氏が日本演劇の現在について講義を行った。日本の演劇は、新劇、アンガラ・小劇場演劇、現代口語演劇などジャンルが混淆しているが、いずれも日本の観客に向けて作品を作っていた。しかし、近年ではそのような作品から普遍的で社会性を持ったテーマが見出されてヨーロッパで脚光を浴びた例も存在する。また、全世界的な傾向として、社会的な内容を訴える手段が「強度」（高い芸術性）から「共感」（当事者性）²へと移行し、芸術という制度の在り方が見直されている。

2 移民や難民の出自を持つアーティストからそれぞれの過酷な経験等を聞き、それを元に演劇を制作する。実際に移民や難民が作品に役者として参加するといった例がある。

第3回 「『演劇』を考える」

日時：2021年6月7日(月) 17:50～19:20

講師：江原早哉香(「東京演劇集団風」演出家)

多文化教育プロジェクト 連続セミナー
多文化共生としての
舞台芸術
第3回
「演劇」を考える
講師 江原早哉香 (44歳/女性) (「東京演劇集団風」演出家)

常々、私たちが「舞台芸術」を見る・触れる・観るためには、
たくさんの方・組織が関わっています。現在の「演劇」には、
多様な文化・経験を容れようとする気遣い、つまり「多文化共生」
の念が込められて入念に考えられています。この「演劇」が持つ
社会的課題を明らかにし、その問題を認識することから始め
たいと思います。そして、その困難に打ち向くため、さまざまな
視点で、さまざまな環境で試みられているいくつかの演劇を取り
上げます。

2021年6月7日(月)17:50～19:20
Zoomウェビナーでのオンライン開催

主催：総合文化研究所 / 共催：国際交流室

第4回 「字幕の考え方」

日時：2021年7月15日(木) 18:00～19:30

講師：馬場紀雄(オペラ演出家)

多文化教育プロジェクト 連続セミナー
多文化共生としての
舞台芸術
第4回
字幕の考え方
講師 馬場 紀雄 (44歳/男性) (オペラ演出)

外国語の舞台作品(演劇・オペラ・ミュージカル)や映画の字幕に
ついたら必ずしも、その言葉が正確で正しい音の発音の
ロジックを伝えるという重要な機能を果たしています。それだけ
ではなく、作品そのもののジャンルとしての特徴を際立たせるための
役割を担うことも、演出の一つとして行われているのです。
「字幕」は必ずしも「Quality per se」(品質そのもの)でなく、
劇のための字幕であると同時に、音楽作品のための字幕でもある
のです。音楽そのものは、しかし、言葉の壁を越えようとするが、
字幕は、音楽そのものの表現を損なう事がないように、
「音楽」によるドラマという全体を精確に表現する必要があります。
このため、字幕の制作も、オーディオ・ビジュアル・オーディオ・ビデオ
の制作のワークフローの一部として、その制作の初期段階から、
制作スタッフと協力して行われます。

2021年7月15日(木)18:00～19:30
Zoomウェビナーでのオンライン開催

主催：総合文化研究所 / 共催：国際交流室

第5回 「ミュージカル」

日時：2021年8月18日(水) 18:00～19:30

講師：高橋知伽江(脚本家、翻訳家)

多文化教育プロジェクト 連続セミナー
多文化共生としての
舞台芸術
第5回
ミュージカル
講師 高橋 知伽江 (44歳/女性) (脚本家、翻訳家)

ミュージカルは音楽劇の一種で、歌やダンス、ミュージカル
は芝居に音楽要素が加わった形に感じています。多
くのミュージカルは、最近のように音楽要素が加わって
いないジャンルに属していましたが、ミュージ
カルという「歌」がどのような力を発揮しているのか、どのよ
うな組織が可能なかを考察することがあります。また、「多文化共生」という本セミナーのテーマを
踏まえて、舞台芸術(日本語・外国語)が観られる
2作品を例にとり、どのようなミュージカル・ジャンルは
どのようなミュージカル・ジャンルを形成し、観客とどのような
一線が通じているかを考察します。

2021年8月18日(水)18:00～19:30
Zoomウェビナーでのオンライン開催

主催：総合文化研究所 / 共催：国際交流室

